

令和5年度

男女共同参画に関する

小学生の絵画・中学生の作文

入賞作品集



主催 日立市・日立市教育委員会

—小学生の絵画の部—

最優秀賞



つちだ れお
(埴山小 4年 土田 獅)

ゆめ しょうらい わたし
「夢をかなえた将来の私」

をテーマに絵を募集しました。
キラキラしているみんなの夢
とても素敵ですね。

優秀賞



とよだ ひろき
(会瀬小 3年 豊田 裕樹)

佳作



みずこし りゅうしん
(大沼小 2年 水越 龍心)



こじま もか
(油縄子小 5年 小島 萌葉)



しぶや そうた
(油縄子小 5年 澁谷 颯大)



しばた じゅり
(会瀬小 2年 柴田 樹里)



すう みぶん
(諏訪小 6年 栗 美文)

最優秀賞

我が家の家庭ルール

泉丘中学校 一年

柴田 しばた 陽生 はるき

みなさんは、家族の中で「家庭のルール」を作っているだろうか。今は変わってきたと思うが、昔は、「男の人は仕事・女の人は家事」と考えられてきたと聞いたことがある。

私の家は、私が生まれた時から父も母も働いている共働きの家だ。私の家も、主に料理や買い物などの家事は母が担当している。けれど、母の仕事が朝早く出勤しなくてはいけない時や、帰りが遅くなったりする時には、私や姉が困る事がないように、父と母は事前に話し合いを行って調整してくれている。

今年四月に、私は中学生になりサッカークラブに入った。三つ上の姉は高校生になり、お弁当を持っていくようになった。以前とは生活リズムががらっと変わってしまった。

私のサッカークラブは、学校から帰宅後の夕

方からの活動となる。練習場は、中学校のグラウンドではなく、日立市内の色々な場所での活動となり、夜遅くまで父と母は、私のために協力しながら送迎や、食事の用意をしてくれている。そのおかげで私は、サッカーに全集中することができている。

また、姉のお弁当作りも母が担当しているが、母が朝早く仕事に行かなければいけない時は、父は慣れないながらも一生懸命、お弁当作りをしている。姉は、両親の負担を軽くするために、帰ってきたらお弁当箱は毎日必ず自分で洗っている。また二学期からは、自分でお弁当を作るために、母の料理のお手伝いしながら、料理の勉強を開始している。

私も姉を見習って、できることから始めようと思った。まず、サッカーの準備は家族に頼らず自分で用意するように心がけている。また、練習場が電車で通える場所の時には、サッカークラブの仲間と一緒に電車に乗って通うことにしている。家でのお手伝いとして一日の終わりをみんながゆっくりくつろげるように、お風呂掃除をしている。

このように、私の家では個人の役割をあまり決め過ぎずに、その時できる人がその仕事をやるのが「家庭のルール」になっている。そして、上手い具合に家が回っているのだ。

以前母から、「スウェーデンでは大多数の女性が生涯働き続けるんだよ」と聞いた。スウェーデンでは、共働きを支援する育児制度がとても充実していて、男性の育児休暇も九割の人が取得していると聞いた。

日本でもスウェーデン同様に男性が育児休暇を取得できるような支援を行っている。父の会社では、男性の育児休暇を取得している人が増えてきていると聞いているが、なかなか全員取得するところまでは達していないようだ。もつと、「男の人だから」「女の人だから」という考えにとらわれない風土、家庭内での理解や、学校、職場、社会、さまざまな環境での理解が進んでいくことを願い、私は今、私ができることをしていこうと思う。



優秀賞

自分を大切に

日高中学校 二年

おおがね 碧唯
大金

最近、LGBTという言葉を目にする機会が多くなったと感じます。初めは何のことだか分らなかったため調べてみると、心と体の性が一致しない人や、両性愛者、同性愛者の呼び方であることを知りました。ランドセルの色を選ぶことができる、制服のスカートとパンツスタイルの自由制など、私の身近なところでも少しずつLGBTへの取り組みがあることに気づきました。

私は小学生のときから、サッカーチームに所属していて男の子と共に活動してきました。よく「女の子なのになんかいいね。」「女の子なのになんかいいね。」と言われることがあります。私自身は嫌だなどという感覚を抱いたことはありませんが、受け手によっては嫌な気持ちになるかもしれません。サッ

カーをする女の子もいれば、ピアノを弾く男の子もいます。女とか男とか関係なしに自分の好きなことをするのが一番だと私は思います。

他にも、女の子はプリキュア、男の子は戦隊ヒーロー。女の子はピンク、男の子は青。こういった当たり前と思っているイメージは誰もがもっているのではないのでしょうか。

私は幼少期、兄がいる影響でよく戦隊ヒーローのテレビを見ていました。そんな私を見て、幼稚園で女の子の輪になじめなくなるのを心配に思った母が、私に少女アニメのプリキュアを見せようと試みたことがあると話してくれました。けれど、私は興味をもたなかったそうです。このように、女の子だからプリキュアが好きとは限らないと思います。

考え方は人それぞれです。自分の意見をおしつけることなく、他の人の考えも受け入れることが大切だと思います。仕草や言葉づかい、服装、趣味などもです。

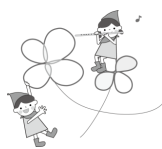
自分の好きなことやものを否定されてしまおうと誰でも悲しい気持ちになると思いま

す。自分とは違った意見でも「そういう考えもあるんだね。」と優しく共感してあげることで男女平等へつながると私は考えます。

私は中学生になったときに、どのチームに所属してサッカーを続けるか悩みました。女の子のチームに入るべきか、男の子のチームでやっていけるのか迷いました。たくさん考えた結果、私は自分が一番したいサッカーができる環境である男の子のチームへ所属することを決めました。はじめのころは、女の子は入ってきたことで、戸惑いを与えてしまったこともありましたが、一緒にサッカーをする仲間に変わりはなく、受け入れてくれたことにうれしくなりました。もちろん力や体力差はあるけれど、今のチームに入ったことは全く後悔していません。

私がいま今と違うチームを選んでいたら得られる喜びや達成感とは全く違うものだったと思います。

自分のしたいことを素直にして、悔いのない人生をつくっていききたいです。



優秀賞

それぞれ違う人

日高中学校 三年

木内 きうち
愛菜 あいな

最近よく耳にするジェンダレスという言葉は、何を指しているのか。男性か女性か分けることはおかしいということなのだろうか。人はそれぞれ違う顔を持って生まれてくる。背の高さも違ければ、体重も違う。目に見えるものを人は「普通」と捉えるのかもしれない。私は女の子だ。自分は女の子だと思っており、家族も私を女の子だと思いで育ててくれている。すれ違う知らない人も私を女の子と捉えているだろう。では、例えば私が自分を「オレ」と表現したら、戸惑うだろうか。人はまず見た目で判断してしまう。それはきつと仕方のないことだ。それが印象というものなのだろう。

ジェンダレスとは社会性別の性差のな

い考え方を意味する。私は誰もが生まれ持った顔が違うように、心も違って当たり前だと思う。だが、見た目で判断するのも当たり前であるとも思う。つまり、その当たり前が当たり前ではないと考えることこそがジェンダレスなのではないだろうか。

私達はい、白か黒か分けたがる。多分その方が分かりやすいからで、線を引きやすいからだ。

では、何のために線を引くのか。体の造りが違う以上、生きる使命が違うからだろうか。女性は子供を産めるが、男性は産めない。でも、子供は男女のどちらも育てることができる。子供から見た時、お母さんとお父さんのどちらが自分を産んでくれたとしても「親」である事には変わらない。

私が考えるジェンダレスは線を引かない感性をもつことだと思う。みんな違う顔を持つ人であること。この人は大柄で可愛い顔の女性だけど、自分のことを「オレ」と表す「人」なのだ、ありのままを受け入れる感性を持つことではないだろうか。自分が思う「普通」を相手に押し付けない社会が、線を引かない世界になるのではないだ

ろうか。

ありのままを受け入れて、認める感性をもつことが大切なのではないだろうか。男性なのか、女性なのかを考える前に、どんな人なのかを感じ取れば良い。どこかで作られた「普通」はどこにも存在しないことを理解するのが必要だ。誰もが線を引かずに認め合える世界になれば、ジェンダレスという言葉もいつか無くなるのかもしれない。

それぞれ違う人。誰もが当たり前にもっている個性だと認め合えば、人と違うから恥ずかしいなんて、自分で自分を虐めなくてもよい優しい世界が広がるのではないだろうか。



佳作

男女平等について考えたこと

久慈中学校 一年

せきやま りのん
関山 凜音

男女平等、ジェンダー平等という言葉は聞いた事があるけれど、今まであまり考えたことはありませんでした。調べてみると、一人ひとりの人間が、性別に関わらず、平等に責任や権利や機会を分かち合い、あらゆる物事を一緒に決めることができることを意味しているとありました。簡単に言うと、男性だから、女性だからという考えを無くすことなのかなと思います。

お母さんに聞いた話では、お母さんが通っていた小中学校では、出席番号が男女で別だったり、体操服の色が男女で違っていたりしたそうです。わたしの通っていた小学校も、中学生になった今も、出席番号は男女一緒だし、体操服も男女の区別なく、同じ

ものを着ています。そういう小さな変化も、男女平等の考えなのかなと思います。

わたしの家では、お母さんが食事を作ったり、掃除や洗濯、幼稚園に通う妹の送り迎えをしています。お父さんは朝早く家を出て仕事に行き、夜に帰ってきます。なので、家のことはお母さんがしています。朝早く起きて、家事をして仕事に行くのは大変だけど、どうして女性だから家事をしないとけないのかとか、不平等だと思ったことはないとお母さんは言います。家において、わたしたち子どもと過ごす時間が好きだし、大切にしたいと言います。お父さんも仕事が休みの日は、わたしたちと遊んでくれたり、お母さんの代わりに食事を作ったりしています。できる人が、できる事をする。これが我が家のルールで、お父さんとお母さんが決めたことです。男性だから外で働いて、女性だから家事をするのではなく、お父さんとお母さんが、できること、やりたいことを選んで決めたルールです。

人の考えはみんな違うので、家庭によつ

てルールは違っていいと思います。あらゆる物事を一緒に決めることができるというのが、男女平等で一番大切なんだと思います。家庭の中だけでなく、一人ひとりの人間が、男性だから、女性だからという考えにとらわれず、自分の意志でやりたい事を決められる、選択できる、生きられる社会になればいいなと思います。



佳作

選択の自由

滑川中学校 一年

武田 隼斗
たけだ はやと

最近、「聞こえてきた声」というACジャパンのCMを見ました。僕はそのCMを見て「これは女性の声、これは男性の声だ」と、無意識のうちに男女の役割について偏見を持っていることに気付きました。

男女共同参画局の調査によると、男女格差が生まれた原因として「男女の役割分担についての社会通念・慣習・しきたりなどが根強いから」、「仕事優先、企業中心の考え方が根強いから」と考えている人が多いという結果が出ています。また出産が可能なのは女性のみであるという点も大きいようです。

男女共同参画の基本理念として五本の柱があると知り、僕はその中で「男女の人権の尊重」について考えました。

僕の両親が就職活動をしていたのは、今から約二十年以上前で就職氷河期世代と呼ばれていたそうです。就職が決まらず、就職が決まっても女性は大手企業の正社員にはほとんどなれず、派遣社員として働く女性が多かったと聞きました。実際に母親は派遣社員で秘書として仕事をし、その後、僕を出産する時に退職したようです。

母親は専業主婦になるつもりでいたらしいですが、当時の派遣社員の女性で育児制度を取得する人はほとんどいなかったそうです。

今では、男女ともに派遣社員も多く、女性が産前・産後休業、育児休業の取得をしやすくなっているようですが、男性の育児休業取得はまだ低いのが現状です。

最近各業界で女性の社会進出の記事を目にする機会が多くなりました。

僕は小さい頃から鉄道に乗ることが好きなので、将来は鉄道関係の職に就きたいと思っています。鉄道の仕事というと、男性の仕事というイメージがありました。今ある鉄道会社の女性比率は約十八%だそうです。

実際に、ぼくが利用した駅で女性の駅員や車掌を多く見かけるようになりました。また、東海道新幹線の女性社員は現在約八十人で、二十一年間で二十倍に増えたそうです。

男性でも女性でも、本当はこの職に就きたい、本当は赤やピンクが好き、本当は電車の運転手になりたい、本当は専業主夫になりたい、などと思っている人はいるでしょう。

僕は小さい頃から好きな色が赤でした。以前までは赤色の物は女性というイメージがあり、赤色の物を持つのを控えていましたが、今は自分の人生、好きな事をしなないと決まらないうように思っていました。

男性はこうあるべき、女性はこうあるべき、という社会の偏見により苦しんだり、何かを諦めようとしている人がいたら、その人たちの選択の自由が増える社会になればいいなと思います。誰もが幸せに暮らしていくために、相手の立場になって考えられる人が増えて、ひとりの人間としてその人が持つ能力を発揮できる未来になればいいなと思いました。



佳作

女性の社会進出について

日立第一高等学校附属中学校 三年

せいのか
清野 まどか
円花

私は、今回女性の社会進出について考えました。なぜなら、ニュースや新聞で目にしたことがあり、私自身にも関わることで、興味をもったからです。

近年、日本では働く女性の割合は増え続けています。しかし、男性と比べると、女性の社会進出度は低いです。そのため、私はどうすれば、より女性の働きやすい社会を作ることが出来るのかについて考えました。

私が女性の働きやすい社会を作るために必要だと思うことは、男女関わらず、働き方改革の一つである定時退社やリモートワークを推進することです。女性が社会進出できな原因として「家事、育児は女性の仕事」という固定観念が挙げられます。そのよう

な固定観念を払拭し、「家事、育児はみんなでやる」とするためには、それをやる「時間」が必要だと考えました。私の家では数年前から父がリモートワークになりました。父は、リモートワークになる前から遊んだり家事をしたりしていましたが、リモートワークになってからの方が関わる時間や話す回数も増え、以前より一層楽しく生活することが出来ています。父は今まで通勤に使っていた時間を家事や自分のための時間に使っています。自宅で仕事をしているので、仕事の合間の時間に掃除や食器洗いをしてくれて、母も負担が減ったと言っていました。このように時間が増えれば必然的にできることも増えます。つまり、働き方改革は、私生活の改革でもあると、私は考えます。

女性の社会進出について調べたり、考えたりしているうちに、まだ沢山の課題点があると感じました。その課題点が少しでも改善されて、女性が社会進出しやすい環境、誰もが自由に職業を選べる社会になってほしいと思います。

私の周りには将来なりたい職業を思い描

いている友人が沢山います。また、私にも将来の夢があります。その夢を性別を理由にあきらめず、自分らしい人生を歩んでいきたいです。

佳作



男女よりも個性を

日立第一高等学校附属中学校 三年

姚 瑶

私は今まで、男女差別について深く考えたことがありませんでした。しかし、男女共同参画について調べ、考えてみると、今まであまり気にしていませんでしたが、自分の身近にもそういった例が多くあることに気がつきました。

思い返してみると、様々な事例があります。例えば、調理実習やアイロンがけなどの家庭的な実習は、女子ならできるといふ偏見により、きまって女子が行っていました。また、それらができない女子がいると、「女子力がない。」「お嫁にいけない。」などの女子を蔑むような言葉がありました。さらに、男子が家事をすることを知ると、「男子なのに家事ができるなんてすごい。」といったよ

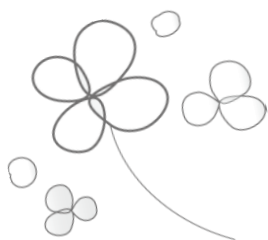
うに、たくさんの褒め言葉が浴びせられませんが、女子がしていても、「当たり前」といったような扱いを受けます。日本にはまだ、家事は女性がするものだという根強い考え方が深く染み着いていると思います。

一方で、私の学校には男子更衣室がなく、女子更衣室だけがあります。一度、生徒総会で男子更衣室を作ってほしいという意見がありましたが、却下されました。「男子だからいいでしょ。」この問題はそんな一言で片付けられてしまいました。これは立派な男女差別です。よく男尊女卑という言葉が聞きますが、今の男女平等というのは、女性の待遇の改善が優先されており、男性差別はあまり議論がされない点に問題があると思います。

このような多くの出来事から、私は、男女というグループで人を判断し、先入観や偏見などで、人を傷つけることをしないようにしようと思いました。「女子なのに、男子なのに」というのは相手を不快な気分にさせます。男女というのは、生まれたときから分けられているもので、自分で選んだものではありません。自分で選んだことでもな

いののに、それで区別されたり、行動を制限されたりするのはあまりにも理不尽です。男子、女子という輪でくくるのではなく、一人ひとりの個性を見るべきだと思います。

しかし、一概に男子と女子の扱いを全て同じにしたら良いわけでもないと思います。男女では身体能力や体つき、時には考え方も違うところが多いかもしれません。男子と女子の違いをよく理解しながら、それぞれの独自性を大切にしていくべきだと思います。私は男女差別を考え、男女で差別され、否定されることがどれだけ人を不快にさせるのかを理解しました。男女という枠に左右されず、その人自身を見て、その人らしさを尊重することによって男女平等に繋がると思います。全ての人の個性が発揮できる社会になることを強く願います。





発行 日 立 市 生 活 環 境 部 女 性 若 者 支 援 課 男 女 共 同 参 画 推 進 室

〒 317-0073 日 立 市 幸 町 1-21-1

T E L : 0294 (26) 0315



日 立 市 男 女 共 同 参 画 社 会
シ ン ボ ル マ ー ク